

定的感情に対して人間はどのよう
に主體的に對する力を身につけ
るのか、という疑問から開始し
た研究です。幼児期には言語
能力の発達を背景に、六歳の頃
には否定的感情への対処方略を
大部分の子どもが生成できるよ
うになります。現在は、なぜ自
律的な対処方略の生成が一部の
子どもで可能にならないのかと
いう事を検討しています。



(人科) 社会福祉学科
小林隆児

本年四月より人間科学部社会
福祉学科に着任しました小林隆
児(こばやしりゅうじ)です。
十八年ぶりに福岡に戻ってくる
ことができて喜んでおります。
昭和五十年三月、九州大学医
学部を卒業し、福岡大学医学部
精神医学教室に入局しました。
そのきっかけは、医学生時代に
九州大学医学部付属病院精神科
外来で土曜日午後から行われて
いた自閉症児療育ボランティア
活動「土曜学級」に入ったこと
です。「土曜学級」では様々な
職種の人たちがボランティアと
して、幼い子どもの代表的な精
神疾患とされ、原因も分からない
謎を秘めた自閉症の子どもた
ちに対して、試行錯誤で療育に
取り組んでいたのですが、医学
生としてまったく素人であつ
た私もその活動に参加するよう
になりました。私が医学部に入
学した一九六八年は、パリで五
月革命が起こり、わが国でも医
学部インターン闘争が勃発し

心身疲労し、人間が「変わる」
にはこのように力を要するの
かと自らについても実感する日
々でしたが、面接を通して来談者
が変化を遂げていかれる様子に
立ち会えているという奥深さは
何にも代えがたいものでした。
現在も通常発達の子ども、成人
に加え、自閉症をはじめとする
発達障害の方々との面接を行っ
ております。自閉症もまた私に
とって臨床を志向した重要な
テーマですが、語り尽くせませ
んのでこの辺といたします。
教育、研究に取り組める環境
を与えていただき、ありがたい
と感じております。どうぞよろ
しくお願いいたします。

七十年安保へと続く、激しい大
学紛争の時代でしたから、私自
身も大学の講義に出席して勉強
することに意義を見出せず、暗
中模索の状態にありました。そ
んな私にとって「土曜学級」で
の生きた学びの場は、当時の私
に取っては有り余るエネルギー
を注げるところとなり、充実し
た時間を過ごすことができました。
今思い返してみても、分か
らないなりに子どもたちとの関
わりをもつために必死で取り組
んだのがよかったのでしよう。
この時の経験が、結局その後の
私の人生を決定づけることにな
りました。

らつきあっていた自閉症の子ど
もたちが成長とともにどのよう
に変化していくのかという素朴
な疑問が、結局は私の最初の研
究テーマとなり、精神科医に
なつて十年間で『自閉症児の精
神発達と経過に関する臨床的研
究』として実を結び、学位論文
を取得することができました。
その七年後には、二〇一例の自
閉症追跡調査研究として英文に
まとめ、自閉症研究としては世
界的に権威のある雑誌に掲載さ
れたことは、福岡での自閉症研
究のひとつの区切りとなりました。

昭和六三年四月、医局を離れ、
大分大学教育学部に転勤し、養
護学校教員養成の教育に従事す
ることになりました。指導者か
ら離れて自立を目指したわけ
です。最初は精神的に辛いことも
あつたのですが、大分での生活
では、「ふぐ」と「温泉」が私
の心身を慰めてくれました。大
分での研究生活は、じつくり
と患者さんと向き合ったおかげ
で、非常に実りあるものとなり、
今日取り組んでいるテーマの萌
芽はこの時期に生まれたもので
す。

勿論のこと今でも、世界中でこ
のような実践を行った人はほと
んどいないのではないかと思わ
れ、今更ながら貴重な経験をし
たものだと感謝しております。
なにしろ、精神科臨床では患者
を診ることはあつても、患者と
最も身近な人との関係を診ると
いうことを丁寧に実践した人は
ほとんどいませんでしたから。
勿論現在においてもそうです。
この経験が今の私に「関係を通
して人を理解する」ことの重要
性を教えてくれました。

東海大学には計十四年間在籍
しました。福岡から東京へ移つ
た時には大都会へのあこがれが
あつたのですが、東海大学は神
奈川県伊勢原市という田舎町に
あり、周辺には文化施設もほと
んどなく、ただただ日々の仕事
と研究に明け暮れる毎日です
た。せつかく大好きだった福岡
から、多大な犠牲を払って東京
に移ったからには、一度は大都
会に住んでみたいとの思いが強
くなり、平成二十年四月、豊島
区にある大正大学人間学部臨床
心理学科に転動しました。臨床
心理士の養成に従事すること
なつたのですが、ここで私はこ
れまで蓄積してきた「関係から
みる患者理解」を学生に教える
ことにエネルギーを注ぎまし
た。

医学部卒業後、「土曜学級」
の中心的指導者であつた村田豊
久先生(その後、西南学院大学
教授として教鞭を取られまし
た)が福岡大学医学部精神医学
教室に在籍されておられました
ので、迷わずそちらに入局し、
子ども専門の精神科医を目指す
ことになりました。学生時代か

そんな生活に忙殺されていた
最中の昨年夏、西南学院大学の
新福教授から突然メールが送ら
れてきて、西南に來ないかね、
どのお誘いを受けました。新福
先生は私の出身地である鳥取県
米子市にある米子東高校の先輩
にあたり、九州での学生時代に
は兄ともども何かとお世話に
なつていました。でも卒業以
来、ほとんどお目にかからない
ままでしたので、青天の霹靂と
はまさにこのようなことをいう
のでしよう。私は十八年前に九
州を離れて以来、九州に戻るこ
となどまったく念頭になく、そ
んな可能性など皆無だと思つて

いました。新福先生と電話をして、こころが随分と動きました。早速妻に相談したのですが、妻は西南学院大学の隣にある修猷館高校の出身でしたので、すぐに二つ返事で了解してくれました。こんな事情で晴れて西南学院大学に着任することができ、心より喜んでおります。

これから私に残されたおおよそ八年間の教員生活を西南学院大学で送ることになりました。が、今は人を育てることの大切さと難しさを日々痛感している毎日です。私のこれまで取り組んできたテーマは、狭い医療の世界というよりも、人に対して何らかの援助をする営み、つまりは赤ちゃんから老人までの「ケア」全般にわたって広く通底する重要な問題だと思っております。「関係」を通して人間を理解し、支援するということの意味を、西南の若い学生さんたちと一緒に考え、探求していきたいと願っています。



(国) 国際文化学科
西山 達也

本年四月より国際文化学部国際文化学科に赴任いたしました西山達也(にしやまたつや)と申します。一九七六年生まれ、横浜生まれの東京育ち、大学院博士課程以降にパリとストラスブールに留学し、福岡での生活は今回が初めてになります。

専門は哲学・倫理学です。フランス・ドイツを中心とする近現代の哲学・思想、特にドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの哲学とそのフランスでの受容について研究してきました。二〇〇一年よりフランス政府給費留学生として独仏国境のストラスブールに留学し、ラターラバルトとナンシーとい

最後にになりましたが、私は以前九州にいた頃、ジョギングを楽しみ、天草ハーフマラソンや指宿菜の花フルマラソンなどを完走するほど熱中していました。しかし、東京に転居してからはもっぱらスイミングに専念していました。今回、九州に戻る際に、重い荷物を持ちすぎたせいか、腰を悪くし、以来走ることは断念し、ウォーキングやスイミングをぼちぼち楽しんでいきます。その他の趣味としては、大学生時代、邦楽部に入り、尺八を演奏していました。西南学院大学の近くにあるもちパレスのホールで、当時現代邦楽のソロ演奏をしたことを懐かしく思い出します。

九州、とりわけ博多の人情豊かなところが大好きで、これからの第三の人生を大いに楽しみたいと思っております。今後ともお付き合いのほどよろしくお願い申し上げます。

う二人の哲学者に師事しながら、博士論文は「マルティン・ハイデガーと翻訳の問題」についての研究をまとめました。「翻訳の問い」に関心をもつようになつたのは、そもそも自身が翻訳が好きで、哲学的テクストを読む際も、理解できない語句や文章に突き当たると、気づいてみると翻訳をしてしまう「習性」があるからです。何十行も、何ページも夢中になつて翻訳していることさえあります。けれども翻訳という行為は、

半ば「勘」に頼る行為で、ある意味で、考えないでもできるという側面も持つものです。モンテスキューは翻訳のことを「他

人に代わって語り、自分の代わりに他人に思考してもらう」行為と呼んでいます。翻訳は、このように、理論的な思考と言語的な実践の境界に関わる曖昧な行為、さらには普遍的なコミュニケーションを指す思考にとつて余計なものとして位置づけられていきます。したがって、従来より翻訳の問題は文法論や文学理論の対象として扱われてきたのですが、私自身のもくろみとしては、「思考すること」と「翻訳すること」の「間」に身を置き、思考と言語の錯綜した関係を考える契機をつかみとることを目指しています。このことは、他者の思考に応答する翻訳というプラクティスに含まれる倫理を捉え返すことに直結すると考える次第です。



(商) 商学科
小野 慎一郎

今年の四月に商学部に着任しました小野慎一郎(おの・しんいちろう)と申します。一九八二年に大分県で生まれ、佐賀県という田舎で少年時代を過ごしました。関アジ・関サバという魚が名産品になっている地域です。今年の三月までは神戸で大学院生活を送っていました。福岡はとても住みやすい環境であると実感しながら、毎日

を過ごしています。私の専門分野は財務会計であり、特に、会計基準に関連する実証分析に関心を持っています。日本では一九九〇年代後半から、新しい会計基準が数多く制定されてきました。また、最近

授業では倫理学と比較文化史を担当しています。特に倫理学は、難解な概念や理論を現代的に噛み砕きながら解説すべく、試行錯誤の日々が続きます。今の哲学ブームに象徴されるように、社会や日常の行き詰まりや、白黒の判断のつかない問題に直面して、明確な答えを求め

る学生たちの渴望も感じます。安易な答えを導くことなく、倫理学や哲学に必要な論理的な思考を、そして私たちが「ロゴス

を持ったボリスの動物」であるという事実に対する理解をじっくり涵養できるように、授業を工夫していきたいと思っております。皆様

に助けをいただければ幸いです。どうぞ、よろしくお願

い致します。

準に関する議論の基礎となるような科学的証拠を提示することにあります。具体的な研究としては、これまでに制定された会計基準によって会計情報の有用性が高まったのかどうかを明らかにするため、大量のデータを使った統計的分析を行っています。そのような研究は、既存の会計基準を改正すべきか否かを判断するために役立つだけでなく、導入を検討されている新しい会計基準の影響を予測するためにも役立つと考えています。

講義では「国際会計論」や「簿記原理」といった科目を担当しています。簿記・会計という科目は、勉強を始めて最初のころに多くの専門用語が登場します。そのため、最初の段階で嫌いになってしまふ学生も多いようです。最初の壁を乗り越えた先に、とても魅力的な世界が